

高木恭造(たかぎ・きょうぞう)☆常設展示作家

1、高木恭造の生涯

<生涯1 幼・少年時代> 0歳～18歳 1903～1921

複雑な家庭環境の中、異母兄弟の末子として生まれた高木恭造は甘えん坊で小学校に入るまで母親の乳を飲んでいたという。小学1年の時、青森で大火があり、その時のショックがもとで母親が亡くなる。その後、家に入った継母と折り合いが悪く恭造は孤独な日々を送ることになる。

中学3年の時、英語の講義を聞きに教会に行き聖歌隊に参加し合唱の楽しさを知る。晩年の自作詩の朗読はこの時の発声勉強が役立ったといわれる。

中学校を出ると津軽半島の褓月村へ代用教員として赴任する。わずか4ヶ月の生活であったがこの時の貴重な体験がのちの『まるめろ』のモチーフとなった。

<生涯2 青森日報記者時代> 19歳～24歳 1922～1927

旧制弘前高校を卒業した高木恭造は、1926(大正 15)年の4月、職探しのため履歴書を胸中に東奥日報社へ向かっていたが、青森日報社の前にさしかかると社員募集のはり紙を目にする。入ってみると思いがけず即採用ということになった。これが主筆福士幸次郎との邂逅のきっかけとなった。地方主義の立場から方言詩を提唱していた福士幸次郎は、普段使っている言葉で詩を書くことを勧める。恭造はこうして津軽方言による詩作に打ちこむことになる。苦難続きの生活の中で、ようやく生きがいを見つけた思いだった恭造だが翌年の春、多忙な新聞社の仕事から逃げるようにして東京へ出た。

<生涯3 満州時代> 25歳～43歳 1928～1946

何の当ても無く満州の土を踏んだ高木恭造は、知人の勧めで満州医科大学に入学するが、間もなく妻ふちが結核で死亡する。4年後、山口ノボリと再婚。医科大学を卒業した恭造は大学の医局や満鉄病院に勤務しながら、詩作や小説の執筆に打ち込む。1939(昭和 14)年作文社より出版された第3詩集『鴉の裔』が満州文話会の第1回作品賞を受賞。

やがて終戦、引き揚げの時、書類の所持が禁止され、日本では陽の目を見なかった 1942(昭和 17)年発行の『奉天城付近』以降の作品が瀋陽市の公安局に眠っているという。

<生涯4 弘前時代> 43 歳～84 歳 1946～1987

満州から引き揚げ、弘前に眼科医院を開業した高木恭造は再び文筆活動を再開する。満州時代に書いた『肉体の図』や方言詩集『まるめろ』を再刊する一方、詩誌「くたふむ」や「亜土」に同人となって現代詩を発表、更に初めて戯曲に手を染め「屋根雪」「帰郷」を書き上演される。

方言詩集『まるめろ』は自作詩朗読ソノシートつき津軽書房版で全国的に知られるようになり、翻訳されて海外に紹介されたり、朗読コンサートが開催されたり多様な広がりを見せて行く。そして青森県文化賞、東奥賞、地域文化功労者などの受賞が相次ぐが 1987(昭和 62)年、体調を崩し生地青森に居を移した。

現代詩人会より先達詩人として顕彰されるが、10 月 23 日、青森県立病院で永眠する。(84 歳)

2、高木恭造の代表作

○方言詩集『まるめろ』

1926(大正 15)年青森日報社に勤めていた高木恭造は主筆として迎えられた作家福士幸次郎と運命的な出会いをする。福士に勧められて初めての方言詩「生活(クラシ)」を書いた高木恭造は、「これでいいからもっと書くように」と励まされ 34 篇の方言詩を生み出す。これらの作品は方言詩集『まるめろ』としてまとめられ、満州へ渡った3年後の 1931(昭和6)年、郷里青森の文学仲間、藤田金一の手によって出版された。

福士幸次郎は<日本が産んだ最初の地方主義詩人として行なった仕事は、この詩集と共に永く詩史上に記載される>と称賛した。

戦後、出版元を変えながら幾度か刊行されたこの詩集は、作者朗読ソノシート付きの津軽書房版により広く知られるようになり、いまなお版を重ね出版されている。

○短編小説「肉体の図」

短編小説「肉体の図」は 1939(昭和 14)年満州で発行されていた文芸誌「作文」に発表されたもので、戦後 1948(昭和 23)年、弘前の青森美術社から刊行された浮彫叢書 I・創作集『肉体の図』や『津軽の人々』に収録されている。

この作品は<医学生の手記>という形をとっており、作者の分身である貧しい医学生が、その貧しい故に傷つき苦しみながら妻と死別する前後の状況を描写したものである。妻ふちの死後 10 年たって書かれたもので、<人間の愛と死をテーマ>に、創作ではあるが場面の設定や状況などがかなり事実即して描かれている。

○エッセイ集『幻の蝶—ある詩人の回想』

1974(昭和 49)年刊行された『幻の蝶—ある詩人の回想』は青森のタウン誌「北の街」に連載された自伝的エッセイをまとめたもので、あとがきに「己自身の縦断面の図を書くつもりで取り組んだ一種の解剖図と云っている」と記している。

小学4年生の時の思い出から始まる詩人の回想は、各時代のエピソードを拾い出して記述され、方言詩集『まるめろ』から 70 年代までに刊行された諸々の作品がどのようにして生みだされたかを垣間見ることが出来る。そして詩人の苦悩と歓喜が鮮やかに描き出されている。

晩年、眼科医院を閉じ青森に居を移した高木恭造は、本格的自叙伝の集大成を構想していたがその夢は果たせなかった。

○詩集『末期の呪文』

方言詩人として知られる高木恭造は、方言詩のほかにも小説や戯曲、そして数多くの現代詩を書いた。現代詩の著書に『わが鎮魂歌』『鴉の裔』『詩人でない詩人の詩でない詩』『架空都市』『末期の呪文』などがある。

高木恭造最後の作品集となった『末期の呪文』は、作者の死生観を通して<詩の本質は伝達やイメージではなく究極は祈りであり呪術の言葉でしかないのではないか>と提言している。

晩年高木恭造は、方言詩集『まるめろ』が全編英訳され海外に紹介されたほか、現代詩数篇も同じように評価され翻訳紹介されたことを、「夢にも思わなかったこと、作品だけが私から離れて勝手に飛び廻っている」と喜んだ。

3、高木恭造のキーワード

<キーワード1 まるめろの詩人>

高木恭造の方言詩集『まるめろ』は、自らが朗読したソノシート付きの詩集の出版や、自作詩朗読コンサート、そのレコード発売、そしてラジオ・テレビへの出演等で全国的に知られるようになる。

“まるめろ”は以前津軽地方でよく見かけた果樹だったが、虫がつきやすく「りんご栽培」に悪い影響を及ぼすため、今ではあまり見られなくなった。現在では“まるめろ”といえば果実よりも詩集の『まるめろ』又は詩人の高木恭造を連想する人も少なくない。“まるめろ”はそのまま食べてはおいしくはないが、最近果実酒やジャムなどの加工食品化されている。なんととっても香りの良さには定評があり、今でも時折市場の店頭に並ぶことがある。

“まるめろ”は素朴な津軽の言葉で書かれた詩集のタイトルとして親近感をもって受け入れられ、今後も末永く記憶されていくだろう。

4、高木恭造のゆかりの場所

①高木恭造の生家

旧青森市米町 113 番地(青森県青森市本町2丁目)

高木恭造は三代続いた開業医高木啓太郎の末子として生まれた。高木医院は土蔵が二つもあるという豪邸で、隣家は今泉書店という本屋だった。恭造は小さい頃からこの店に自由に出入りし、絵本や雑誌を引掻きまわし本に親しみを覚えていった。

②高木恭造が代用教員時代を過ごした

津軽半島巖月の高野崎(青森県東津軽郡今別町)

青森中学校を卒業した高木恭造は津軽半島褒月村に代用教員として赴任する。そしてこの村での4か月の体験が方言詩集『まるめろ』の「陽(シ)コあだネ村」の作品となった。

1988(昭和63)年教え子たちの努力で褒月の部落が一望できる高野崎に、この詩の全文を刻んだ文学碑が建立された。

③高木恭造の引揚げ直前までの住居

旧満州国鞍山(中華人民共和国鞍山市)

満州に渡って一年後に妻ふちと死別した高木恭造は、やがて方言詩と訣別、散文詩と小説へと移っていく。満州医科大学卒業後満鉄病院、大学研究室等に勤務しながら執筆を続けた。引揚げ直前まで住んだ鞍山の住宅は今もそのまま、中国の作家羅丹が住み書斎もそのまま使っているという。

④高木恭造が弘前時代に住んだ

弘前の繁華街土手町の裏通り(弘前市北川端町1番地)

終戦で日本に帰った高木恭造は、1948(昭和23)年弘前市に眼科医院を開業、まず生活の基盤を作った。眼科医として患者を診察するかたわら、詩や小説を執筆した。やがて文学志向の青年達が集まってきて文学論をたたかわしたり、批評会を開いたりするようになる。

5、高木恭造の関連人物

☆福士幸次郎(ふくし・こうじろう):文学の師

青森日報社に勤務していた高木恭造は主筆として迎えられた福士幸次郎と邂逅した。詩人であり地方主義運動を展開した作家であった福士幸次郎は、高木恭造に方言詩を書くように勧める。試作的に書いた「生活(クラシ)」を誉められた恭造はその後、方言による詩作に打ち込むようになり、青森で「獵騎兵」を出していた藤田金一らの手で恭造の詩が方言詩集『まるめろ』として刊行された。福士幸次郎は自らその序文の執筆をかって出、後輩詩人の処女出版に賛辞を贈った。

☆安西冬衛(あんざい・ふゆえ):文学の師

高木恭造の詩集『まるめろ』にいくつかの一行詩がある。たとえば<理髪屋(ジャンボヤ)の横丁(ヨゴチヨバ)まがたら練(ニス)焼ぐ匂(カマリ)アしてだ>は恭造が敬愛する安西冬衛の<くてふてふが一匹韃靼海峡を渡っていった>の作品を意識し、短詩散文詩の詩法を手本にしたと述べている。満州へ渡るとき高木恭造は百田宗治の安西冬衛宛紹介状を持っていた。当時安西冬衛は大連に住み新しい詩論の研究をなして日本詩壇にも先駆的な影響を与えた詩誌『亜』を発行していた。安西冬衛を訪ねた恭造は、たびたび親交を重ねて影響を受け『わが鎮魂歌』を出版した時、“スモール・アンザイ”と言われたほどであった。

☆藤田金一(ふじた・きんいち):作家仲間

福土幸次郎の勧めで青森日報に方言詩を発表していた高木恭造は、上京後その発表の場を失っていたが、青森で柿崎守忠や藤田金一が詩誌「獵騎兵」を出したのでその同人となった。満州に渡った恭造はその後、環境の変化から方言詩を書けなくなるが青森にいた藤田金一が自ら編集から装丁まで手がけ、方言詩集『まるめろ』を出版してくれた。<若し藤田金一がこれらを作品として纏めてくれなかったならば、とうの昔に散逸してしまっていたであろう>と恭造は感謝の一文を残している。

☆J(ジェイムズ)・カーカップ:文学の恩人

イギリスの詩人J・カーカップは1967(昭和42)年末方言詩集『まるめろ』に注目、中野道雄の協力を得て「冬の月」を英訳、カナダの季刊紙「マラハット・レビュー」に紹介した。更に1970(昭和45)年朝日新聞社が世界十数カ国に販売網を持つ英文季刊紙「ジャパン・クォーターリー」が『まるめろ』全編を『冬の月』と改題して発表した。これもJ・カーカップが翻訳にあたった。

J・カーカップは<これらの詩は英訳してもなお、独創的な美を有し、力強さ、苦しき、繊細な感受性を表わし、通常のことばで赤裸々な日本人の生活を知らせてくれる>と解説している。

6、高木恭造の資料紹介

○あゝ故郷(クニ)もいま雪ア降てるべなあ

書画(色紙)

272mm×241mm

『まるめろ』所収の詩「まるめろ」の一節。

「あゝ故郷(クニ)もいま雪ア降てるべなあ」

○「エチュード」

原稿

215 mm×295 mm

「エチュード」の発表誌紙不詳。執筆年月日は「27. 12. 20」と見える。

(北彰介氏寄贈)

7、高木恭造年譜

1903(明治 36)年…10 月 12 日青森市米町に生れる。

1921(大正 10)年…青森県立青森中学校卒業。

1922(大正 11)年…東津軽郡褒月尋常小学校の代用教員として赴任。

1926(大正 15)年…旧制弘前高等学校理科甲類卒業。同年青森日報社に入社。福士幸次郎と出会い、初めて津軽方言詩を作る。岡村ふちと結婚。

1927(昭和2)年…青森日報社を退社して上京。史談出版社に就職。

1928(昭和3)年…不況で史談出版社倒産。満州へ渡る。

1929(昭和4)年…満州医科大学に入学。妻ふち死去。

1931(昭和6)年…方言詩集『まるめろ』郷里青森で出版。

1933(昭和8)年…山口ノボリと結婚。満州医科大学卒業。新京満鉄病院に就職。

1935(昭和 10)年…詩集『わが鎮魂歌』出版。

1937(昭和 12)年…本溪湖満鉄病院の眼科耳鼻科医長となる。

1939(昭和 14)年…詩集『鴉の裔』を出版。第 1 回満州文話会作品賞受賞。

1942(昭和 17)年…満州医科大学の眼科教室に留学。奉天に転居。短編小説

集『奉天城付近』刊行

- 1944(昭和 19)年…医学博士号を受ける。鞍山満鉄病院へ赴任。
- 1946(昭和 21)年…終戦のため満州から引揚げ、尾上町に落ちつく。
- 1948(昭和 23)年…弘前市に眼科医院を開業。小説集『肉体の囚』刊行。
- 1953(昭和 28)年…方言詩集『まるめろ』棟方志功装幀で再刊。
- 1954(昭和 29)年…詩誌「くうたふむ」創刊、同人となる。
- 1958(昭和 33)年…初めての戯曲「屋根雪」を「地方演劇」に発表。創弦座によって上演される。
- 1959(昭和 34)年…戯曲「帰郷」発表、翌年創弦座が上演。
- 1962(昭和 37)年…「あるめぐらの話」が自らの朗読でラジオ青森から放送される。第4回青森県文化賞を受賞。
- 1963(昭和 38)年…詩・文・写真集『津軽』新潮社より刊行。
- 1965(昭和 40)年…『方言による三つの物語』、詩集『詩人でない詩人による詩でない詩』刊行。
- 1967(昭和 42)年…短編小説集「婆々宿」と自作詩朗読ソノシートつき方言詩集『まるめろ』刊行。
- 1968(昭和 43)年…小説『落葉の群れ』刊行。
- 1970(昭和 45)年…「ジャパン・クォーター」に『まるめろ』全編が英語に訳され掲載される。
- 1972(昭和 47)年…創作集『津軽の人々』刊行。
- 1974(昭和 49)年…東京・渋谷ジャンジャンで朗読会開催、翌年自作詩朗読レコードを出版、自伝集『幻の蝶』刊行。
- 1975(昭和 50)年…第 28 回東奥賞受賞。
- 1976(昭和 51)年…詩集『架空都市』、方言詩集『雪女』刊行。
- 1978(昭和 53)年…同人誌「心象」創刊、同人となる。
- 1980(昭和 55)年…詩集『末期の呪文』刊行。
- 1981(昭和 56)年…自作詩朗読コンサート「高木恭造の世界」青森市民文化ホールで上演。翌年、レコードとなり発売される。
- 1983(昭和 58)年…『高木恭造詩文集』全三巻のうち、第一巻と第二巻刊行。
- 1985(昭和 60)年…地域文化功労者文部大臣表彰を受ける。体調を崩し眼科医院を閉院。
- 1986(昭和 61)年…全方言詩+写真集『津軽残照』刊行。劇団「雪の会」が恭

造作品による「まるめろの幻影」を第1回国民文化祭東京演劇フェスティバルで上演。

1987(昭和 62)年…弘前市から青森市に転居。現代詩人会より先達詩人として顕彰を受ける。10月23日永眠。

1988(昭和 63)年…東津軽郡今別町高野崎に「陽コあだネ村」の文学碑建立される。

1990(平成2)年…弘前市馬喰町に「冬の月」文学碑建立。『高木恭造詩文集』全三巻の第三巻刊行される。